オトナのふるさと学習

月刊このへん だいすき

令和元年 7月号

作　セルジュ・タカハシ

記録や形には残らず、日々失われていく地域の記憶
いまさら人に聞けない「このへん」限定のジャンゴな話題あれこれ
ずっと「このへん」なあなたも、最近「このへん」なあなたも、
読めばたちまち、「このへん だいすき」に

「このへん」が元気だったころ、元気な私鉄が走っていた。昭和の悲劇に見舞われた、列島横断計画の夢のあと。

元気だったころ

大正から昭和のはじめごろにかけて、「このへん」はけっこう元気だった。横手駅を始発に貨物や人を運搬する鉄道路線が計画されたのもこのころ。

昭和の悲劇

ウォール街から始まった昭和４年の世界恐慌、東北の冷害に日中戦争が追い打ちをかけ、鉄道延伸は中止に。その後も、洪水や老朽化に苦しんだ。

列島横断の夢

横手から現在の由利本荘をつないで日本海をめざすとともに、横黒線とよばれた北上線と釜石線をつないで太平洋に出る横断鉄道の計画だった。

私鉄は横荘鉄道といいました。

横手から由利本荘市東由利の老方までの三十八・二キロを、十五の駅で結んだ鉄道路線です。「このへん」の手軽な足として横荘ッコと呼び親しまれました。横荘鉄道には夢がありました。羽後本荘と結んで日本海に出る一方で、現在の北上線、釜石線とつなげて太平洋へ至るという日本列島横断鉄道の計画です。大正九年には、羽後大森までが開通し、十一年には本荘からの西線も前郷駅まで完成しました。

しかし、昭和に入り二井山―老方間の難工事と前後して世界恐慌が勃発。冷害、凶作に日中戦争の開戦で、延伸計画は中止に追い込まれてしまいます。

終戦後も、水害や橋脚の崩壊などの災害で苦難の運行が続き、昭和四十六年、横荘線は廃線の日を迎えることになりました。

線路跡の一部は県道となってバスが走り、西線は由利高原鉄道として営業を続けています。

今でも横手駅には、横荘線がかつて発着した五番ホームが、夢のあとを静かに語っています。

「このへん」の暮らしの足として活躍した「横荘ッコ」こと横荘鉄道。戦争と災害についえた、列島横断鉄道の夢のあとは今も残る。